

# 緒方洪庵

1810年(文化7年)〜1863年(文久3年)  
備中国足守(現岡山市北区足守)生まれ

「適塾」を開き近代日本の礎となる人材を育成、  
天然痘撲滅にも貢献した日本近代医学の祖。

## 病弱の我が身から選んだ医の道

1810年(文化7年)7月14日、備中国足守(現岡山市北区足守)に巨星が生まれた。父は足守藩の下級藩士、佐伯瀬左衛門、幼名は章。後に、大坂(現大阪)に「適塾」を開いて近代日本の礎となる人材を育てるとともに、天然痘治療に貢献した当世の蘭方医、緒方洪庵である。

8歳の時、天然痘にかかりながらも「命を取り留めるという身をもつての経験から、幼心に自分も将来は医者にといい想いを持つていたのであろう。16歳の時、足守藩の大坂蔵屋敷留守居役となった父に付いて大坂へ移った翌年、蘭方医・中天道の私塾「思々斎塾」の門を叩く。天游は医学のほか、算理(物理学)、天文学に長じており、大阪蘭学会を代表する西洋医学の先駆者。その門下生となった洪庵は、無我夢中で勉学に励んだ。天游の元にあった間に、当時読むことができた訳書の類はほぼすべて読破したという。入門から4年、勉強熱心な洪庵に大いなる

可能性を感じた天游は、さらなる向学のため江戸行きを勧めた。

## 江戸へ長崎へ、苦学と向学の日々

1830年(天保元年)、洪庵は江戸に向けて旅立ち、坪井信道が開いていた安懷堂塾に入門。医学やオランダ語を学ぶ。師の信道は苦学力行の末、江戸の蘭医学の大家になった人であるが、信道の元での生活は修業の身ということもあり苦学の日々を送ることになる。塾の玄関番のかたわら、義眼を作ったり按摩をしたりして学資を稼いだ。師の信道もその窮乏ぶりを見かねて自分の着ている衣服を脱いで洪庵に与えるほどであった。信道は小柄、洪庵は大柄で着物は膝が出るほどであったが、洪庵は気にせず勉学に励んだという。さらに、師の信道の勧めにより、杉田玄白の教え子にして信道の師でもある宇田川榛齋の門に出入りし、薬品の勉強にも取り組んだ。

この頃には洪庵の実力はかなりのものになっていたようで、オランダ語の原書を

読破する一方、数十冊に及ぶ医書の翻訳なども手がけるほどになっていた。向学の想いやまなび洪庵は、1836年(天保7年)、今度は蘭学の本場・長崎へ遊学し、オランダ人医師の二マンのもとで医学を学んだとされている。大坂で「適塾」を開くのはその翌年のことである。

## 大坂に開いた蘭学塾「適塾」

1838年(天保9年)、洪庵は敬愛する天游先生の想いが遺る大坂で医師開業する傍ら、恩師・天游の「思々斎塾」にあやかつて塾名を付けた蘭学塾「適塾(適々斎塾)」を開く。洪庵29歳の時であった。

洪庵には、ある理想があった。「おのれの心に適うところを楽しむ」と言う意味である洪庵の号「適々斎」にちなんだ塾名には、「勉学とは、人から押しつけられるものではなく、自分でやりたいものをやれば、自然と成長してゆく」という理念が込められていた。洪庵は、決して門人を叱らなかつたという。「適塾」は元来、医学・医療を教える塾であったが、門人



緒方洪庵の肖像

は興味のあることは何でも学べる自由闊達な空気にあふれていた。蘭学を通して世界の変化を感じ取っていた洪庵は、世界のことを理解できる幅広い人材を育てたいと考えていたからか、適塾では蘭書の会読に力を注いだ。



緒方洪庵が開いた蘭学塾「適塾」(大阪大学適塾記念センター・大阪市中央区北浜)  
現在残っている適塾の遺構は、塾開校から5年後の1843年、初代の塾が手狭になったため、商人の家を買い取り移転したもの。

## 史蹟緒方洪庵舊宅及塾

青雲の志熱き塾生たちにとってはオランダを通じてもたらされる最新の知識、技術には驚くものがあったのだろう。関心の赴くままに、様々な分野の本を貪欲に読んだ。判らぬ言葉の意味を探して、適塾に冊しなかつたゾーフ辞書 蘭和辞書」を奪いあうように利用した。そのため、辞書を置いていた部屋は「ゾーフ部屋」と呼ばれ、明かりが消える間がなかったといわれている。

## 近代日本の礎になった塾生たち

開塾以来、蘭方医・緒方洪庵の名声の高まりとともに、洪庵に教えを請いたいという塾生は続々と押しかけた。洪庵が塾長を務めた25年間の塾生は三千人を



かつて教室であった適塾の2階

数える。塾生たちの勉強ぶりはすさまじかつたようで、塾生の人である福沢諭吉は自伝の中で「凡そ勉強ということについてはこのうえにしようもないほどに勉強した」と述懐しているほどである。

適塾は全国から駆けつけた塾生にあふれ、談論風発の塾風はその後の明治維新の激動の中、日本の近代化に大きく貢献した多くの人材を輩出している。時代を代表する思想家であり慶応義塾大学を創立した教育者の福沢諭吉をはじめ、明治新政府における初期の陸軍政策を担った大村益次郎、東京医学校(現東京大学医学部)校長を務めるなど日本の医学界に大きな功績を残した長与専斎、明治新政府の官僚として工業の近代化に貢献した大島圭介、「同愛社」を創建し窮民医療に尽くした高松凌雲ら著名な面々ばかりでなく、全国各地で医療などの近代化を支えた塾生たちが多数いる。彼らは国元に帰った後も書簡のやりとりなどで交流を続け、近代日本に向かう知識と行動を広げていったのである。

## 日本で初めて種痘を世に広める

洪庵は適塾を運営する傍ら、医者としても偉業を成し遂げている。江戸時代、最も恐れられていた疫病であった天然痘を予防する種痘を広めたのである。

1796年、イギリスのジェンナーによって開発されていた牛痘接種の痘苗がわが国にもたらされた1849年(嘉永2年)、洪庵は種痘所(後に「除痘館」と改称)を大坂に設立。牛痘種痘法による切痘を世に広める活動を大坂から開始したが、その事業は苦難の連続であった。

当初は種痘に対する世の中の理解が低く、「種痘をすれば牛になる」等の迷信がはびこっていた。人々に種痘を受けてもらうことさえ難しかったのである。

しかし、洪庵らはそうした誤解や悪評に屈することなく、当初は治療費を取らず患者に種痘を勧め、関東から九州まで186カ所の分苗所を設立。そこで痘苗の種を絶やさないよう四苦八苦しながら治療を続け、種痘の普及に努めた。そして、設立から足掛け10年後の1858年(安政5年)、除痘館はようやく幕府に認められ、日本初の公的な種痘施設になったのである。

また、除痘館が公認された安政5年は、コレラが大流行した年。この時、洪庵は過労で体調を崩しながらも懸命に患者を診察し続け、同時に、コレラ治療に関する手引書「虎狼病治準(ころうちじゅん)」を出版して医師らに無料で配布している。攘夷だ開国だと騒がしかった幕末の世情の中、それに動揺することなく、自らのやるべき医業にどっかりと腰を据えて取り組んだのである。



「除痘館」跡(大阪市中央区今橋)

医療の心を今に伝える人間洪庵  
1862年(文久2年)、名声が高まっていた洪庵は度々の辞退もかなわず、幕府の奥医師兼西洋医学所頭取として江戸に召し出された。しかし、わずか10ヵ月後の翌年6月、結核を患っていた洪庵は、江戸の西洋医学所頭取屋敷において多量の咯血により急死した。享年54歳だった。洪庵は日本初の病理学解説書「病学通論」のほか、日本の内科学の発展に多大な貢献をした「扶氏経験遺訓」など、数多くの翻訳本や著書を遺している。その「扶氏経験遺訓」巻末には、医師の戒めとした12箇条に及ぶ「医戒の要」があり、冒頭の二箇条にはこう綴られている。  
一・医の世に生活するは、人のためのみ、おのれのためにあらずといふことをその業の本旨とす。  
二・病者に対しては、唯病者を知るべし。貴賤貧富を顧ることなかれ。(略)  
医師を仁術とし、「道のため、人のため、国のため」という信念を貫き通した人間洪庵と適塾そのものである。